

人生ハンド仏句

第167号
H. 28. 2. 1
(毎月1日発行)

四苦八苦

住職 谷川寛俊

新聞やテレビを見てみると、毎日のように悲しい事件事故が続いて起きるものだと、心が痛んでしまします。東日本大震災で被災した地域と住民は、復興と言うにはまだまだほど遠い生活を余儀なくされている現実を見聞すると、気の毒としか言いようがありません。また先月、軽井沢で起きたスキーバスツアーの転落事故では、運転手を含む十五人もの前途ある若き大学生達が犠牲となりました。本当に心からお悔やみ申し上げます。生きていけば、人間は何時、如何なる時に災難に遭い、悲しい思いと、苦勞が付きものです。お釈迦様はハッキリ仰っておられます。「この世のあらゆる出来事や物事は全て、皆苦である」と。つまり、自分の思うようにならず、また望む通りにならず、四苦八苦しなから現実のこの世の中で生きていかなければならぬのです。「四苦」とは、生老病死それぞれ代表的な苦しみを言います。

①生きていく為のあらゆる苦しみ。
②老いていく苦しみ。③病気になる苦しみ。④死の苦しみ。「八苦」とは、「四苦」の他に「八苦」が加わって「十二苦」というわけではなく、「四苦」の他に「四苦」が加わり、合計「八苦」となるわけなのですが、「生老病死」に続いて：⑤愛別離苦(あいべつりく)：愛する者と別れなければならぬ苦しみ。⑥怨憎会苦(おんぞうえく)：憎しみ合う者同士が合わなければならぬ苦しみ。⑦求不得苦(ぐふとつく)：欲しい物が得られない苦しみ。⑧五陰盛苦(ごおんじょうく)：五体から発するものの苦しみ。四苦八苦の中で最後に説かれたのがこの『五陰盛苦』なのですが、全体の苦しみを総括的に教えています。「五陰」とは五つの集まりを意味し「色(しき)」：肉体や物質のこと。「受(じゆ)」：精神や感覚のこと。「想(そう)」：表象作用のこと。「行(ぎよう)」：形成作用、意思ということ。「識(しき)」：認識作用、区別すること。この五つが和合して構成されています。煩惱具足、即ち、煩惱が既に備わっている私達を現しています。たとえば、目では綺麗なものを見たい。耳は良い音を聞きたい。鼻は良

い香りを嗅ぎたい。舌は美味しい物を味わいたい。身体は柔らかい物に触れてみたい。つまり五感から発する欲求に対する苦しみを言います。行動せず黙ってればトラブルなどの問題に遭遇する事は少なくなつてきます。それによつて苦しむ事も少なくなるでしょう。しかし、それでは生きていく事が出来ません。だから、人は一生懸命でも、活発に意欲的に活動すればするほど、頑張れば頑張るほど、様々な軋轢(仲が悪くなるなどの葛藤)、を生じて苦しみに遭遇する事が増えます。それでも一生懸命に生きなければいけないのです。生きようとすればするほど『四苦八苦』の苦悩に陥つてしまうのです。その原因は、自己中心的な煩惱だと説かれています。だったら、こんな苦しみの多い世界に生まれてこなければ良かったのに：：と思いたくもありません。ではなぜこのような苦勞の多い娑婆世界に生まれてきたのでしょうか？それは苦しみや楽しみや、時には

「人生ハンド仏句」
と打ち込んで頂ければ、ホームページにつながります。

編集・発行
玉蓮山 真成寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でもお寺につながります。

ホツとする一時の安らぎの世界は、この苦しい現実の世界にしか存在しないからです。この現実の世界にあって、しかも私達は選ばれて生まれてきたのであります。苦樂を共にする事によつて、生かされているという実感を味わう事もできるのです。せっかく人間世界に生まれ合わせる事が出来たのですから、少しでも良い事をして、そして周囲の人達から「あの人は良い人だったね」と言われる様な生き方をすることが、実はこの世に生まれてきた目的でもあったのです。

「値あい難がたき人間にの身に生まれ、
値あい難がたき仏法(法華經・お題目)に
会い奉たれり
(日蓮聖人のお手紙『聖愚問答抄』より)

